

研修報告書 No20

東京大学病院 研修医
研修施設：大月町立国保大月病院
宿毛市沖の島へき地診療所

今回、私は東大病院の研修プログラムの一環で、大月病院での1か月間の研修の機会をいただいた。

東大病院は1000床規模の大学病院で、診療科は外科・内科ともに細分化され、患者さんの多くは、他院で診断がついた後での治療症例や、診断に難渋している症例だった。

そのため、医師に求められる資質は専門的な知識と、最新の機械や薬を使うための知識などであったように考える。そのような病院でのみしか、研修を行ってこない私にとって大月病院での一か月、沖ノ島診療所での3日間はとても新鮮で有意義な研修となった。

地域医療＝総合医療(なんでもみる)というイメージ通りの研修であった。

今回の研修で感じたいくつかの点について挙げたいと思う。

まず、患者さんの多くが高齢であるということである。大学病院に入院する患者の多くはせいぜい80歳台前半までの患者である。

しかし、大月の患者は90歳～100歳であり、平均寿命を大きく超えた患者にどれほどの治療をするべきなのか考えるきっかけとなった。その治療を検討するのは患者本人や家族なのだが、どのような選択肢を提示し、最終的に施行するのは医師であり、医療の知識のみならず、倫理感や社会性などが求められる場面であると感じた。

高齢者の多くは、親戚が近所にいるわけではなく、一人暮らしであったり、夫婦の二人であったりと、ひとたび怪我をしたり、持病が悪化した際にはその生活は破綻し、退院後の生活も危うくなる。この状況は首都圏でも通じることなのだが、若い労働力の少ない地域ではその状況はさらに深刻であるのだろう。

次に、整形外科疾患で受診する患者が多くいるということである。

患者が高齢者であることにも起因しているが、転倒による骨折、骨粗しょう症、腰痛やひざの痛みを主訴に外来を受診していた。そのような患者に対応するためには、整形外科の知識を持った医師の必要性を感じた。しかし、初期研修後より地域での医療を担う医師になると、整形外科を専門的に勉強する時間がないのが現状であるようで、地域に専門家を派遣することは難しいようであった。

そして、患者が治療を望まない際の医師の対応である。地域に住むお年寄りの多くはその地域での医療を希望され基幹病院まで行くことを拒むこともしばしばであった。「これで死んでも悔いはない」などと言うが、疾患の程度も、年齢からも検査を行うべきだと思う患者に対し、医師としてどのような態度をとるべきなのかは常に悩むことなのではないかと思う。沖ノ島診

療所のような、数少ない島民を相手とした医療は、医師と住民の信頼関係がより問われる。医師が強く指導することによって治療をあきらめてしまう患者もいるそうだ。東京のように、病院が多くあり、医師も多い地域では、患者は医師を選ぶことができる。しかし、沖ノ島では、島民は医師を選ぶことはできない。そういった状況下で、言わば外から来た医師が、島民と信頼関係を築き、患者にとって最良の道を示すことは、本当に難しいのではないかと感じた。

最後に、ご丁寧に対応していただいた大月病院の先生、看護師さん、職員の方々には心より感謝しております。ありがとうございました。